

# 追 悼



## 故 福地總逸 先生 略歴

(昭和 5 年 3 月 11 日～平成 23 年 8 月 22 日没)

### <略歴>

昭和 5 年 3月11日 仙台市において出生  
 昭和25年 第二高等学校(旧制)理科卒業  
 昭和29年 東北大学医学部卒業  
 昭和30年 東北大学医学部附属病院にて実地修練修了  
 医籍登録 156562 号  
 昭和30年 東北大学医学部第二内科入局  
 昭和32年 東北大学医学部助手(第二内科)  
 昭和36年 学位(医学博士)授与  
 主論文：高血圧症における尿中アルドステロン排泄量に関する研究  
 昭和39年 東北大学医学部講師(第二内科)  
 昭和40～42年 米国ミシガン大学内科学教室に文部省在外研究員として留学  
 昭和46年 東北大学医学部助教授(第二内科)  
 昭和46年 国際シンポジウム「腎臓学における核医学の利用」に発表のためニューヨークに出張  
 昭和49年 国際腎臓学会シンポジウムにおいて座長ならびに発表のため西ベルリンに出張  
 昭和50年 福島県立医科大学教授(第三内科)  
 昭和59年 第 7 回国際内分泌学会に発表のためケベックに出張  
 昭和60年 第 15 回日本腎臓学会東部部会会長  
 昭和62年 第 10 回国際腎臓学会において発表のためロンドンに出張  
 昭和63年 第 13 回国際糖尿病学会において発表のためシドニーに出張  
 平成 2年 第 13 回国際高血圧学会において発表のためモンテリオールに出張  
 第 11 回国際腎臓学会サテライトシンポジウム座長(東京)

平成4～6年 福島県立医科大学附属看護学校校長(併任)  
 平成 7年 3月 定年により退職  
 現職：財団法人脳神経疾患研究所副理事長(附属内分泌代謝研究所所長)

### <学会活動>

#### 全国

日本内科学会専門医制度審議会委員  
 日本内科学会評議員  
 日本腎臓学会監事  
 日本内分泌学会理事  
 日本高血圧学会評議員  
 日本糖尿病学会評議員  
 日本臨床代謝学会評議員  
 日本同位元素協会常任委員

#### 福島県

福島県高血圧症研究会会長  
 福島県糖尿病研究会会長  
 福島県腎臓研究会会長  
 福島県内分泌代謝研究会会長  
 福島県動脈硬化症研究会会長  
 福島県高脂血症研究会会長  
 福島県インスリン研究会会長

#### 学会認定医など

1998 年 日本内科学会認定内科医(15459 号)  
 1991 年 日本腎臓学会専門医(911022 号)  
 日本腎臓学会指導医(673 号)  
 1992 年 日本内分泌学会内分泌代謝科(内科)専門医(1920177 号)  
 1992 年 日本循環器学会専門医(03397 号)  
 1994 年 日本糖尿病学会認定医(1829 号)

## 福地總逸先生を悼む

福島県立医科大学腎臓高血圧・糖尿病内分泌代謝内科(第三内科)

渡辺 毅

日本腎臓学会名誉会員・福島県立医科大学名誉教授 福地總逸先生は昨年(平成 23 年)8 月 22 日に逝去されました。享年 81 歳、長寿社会の今日ではまだまだ人生を楽しんで戴きたい年齢であり、残念至極です。

私は、福地先生の後任として福島県立医科大学第三内科に赴任した縁でこの追悼文を書かせていただいています。しかし、私の赴任は福地先生の退官から 2 年を経過した後であり、前任地が東京であったこともあり、直接ご指導を受けた機会は、教室の同窓会、学会、個人的に先生が教室を訪問されたとき、私が仙台のお宅に招待されたときなど限られたものでした。したがって、本文の内容は、私が先生にお会いした限られた体験と、先生の直弟子にあたる橋本重厚 福島県立医科大学附属病院安全管理部長をはじめとする教室員や同窓の先生方に教えていただいた事実に基づいていることをお断りしたいと思います。

私は、先生に対しては、常にご自分の信念を堅持され、<sup>かくしゃく</sup> 矍鑠とした姿勢を崩されない古武士という印象を持っています。これは、先生が宮城県仙台市に生を受けられ、旧農林省官僚であられたお父上の厳格な教育によるものと推察しております。また、10 代後半の青年期には、お父上がシベリア抑留で不在という苦難の時期も過ごされたと聞いております。この矍鑠とした姿勢は、晩年数年の闘病生活中に何度かお会いしたときまで崩されませんでした。福地先生の信念の骨格は、知の人であるべきことで、その人生は医学者そのものでした。また、その信念の根底には、未来に対する楽観性を感じざるをえませんでした。

先生は医学を志されて旧制第二高等学校から東北大学医学部に進学され、昭和 29 年に卒業の後、東北大学第二内科に入局されました。当時の第二内科中沢房吉教授から、電解質と糖代謝の関連というテーマを与えられ、腎機能に関連する実験に昼夜を問わず没頭され、1 年半で論文を仕上げられたとのこと。一方、臨床においては中沢教授の後任、鳥飼龍生教授の下で本邦第二例となる原発性アルドステロン症を経験し、その過程でアルドステロン測定の実用性を強く認識されました。当時、アルドステロン測定は本邦で行うことができる研究施設も機器もなく、世界でもごく少数の研究者しか測定に成功していなかったため、その研究にはきわめて大きな困難が伴った由です。同講座のみならず、農学部、工学部の研究者を訪ねては実験の方法論を習得し、福地先生自ら実験器具を手作りし、本邦で最初のアルドステロンの測定に成功し、原発性アルドステロン症の血液検査による診断を可能にする基礎を確立なさいました。その後 1965 年から 2 年間原発性アルドステロン症を最初に報告したミシガン大学 Conn 教授の下に留学し、ヒトレニンの純化とそのラジオイムノアッセイ法を研究され、帰国後、アルドステロン、コルチゾール、アンジオテンシンなど各種電解質・水調節ホルモンのラジオイムノアッセイ法を確立されました。さらに、アルドステロンのラジオイムノアッセイ法の簡易化と 131I-アドステロールの開発に携わり、この成功により、副腎シンチグラフィ法と副腎静脈サンプリング法を確立されました。その結果、本疾患のスクリーニングが容易となり飛躍的に診断数が増加する一方、診断精度も向上しました。原発性アルドステロン症は診断法が確立される以前は、若年のうちに脳出血、腎不全、心不全をきたし、多くの人が亡くなっていた疾病です。今でこそ、血漿レニン活性、血中アルドステロン濃度測定を用いる各種負荷試験と副腎静脈サ

ンプリングによる診断法が確立され、本症が高血圧の5~10%を占め、二次性高血圧のなかで最も高頻度な疾患であることが示され、多くの人たちがこの疾病から解放され、完治、あるいは高血圧をコントロールできるようになりましたが、その最大の功労者のお一人が福地総逸先生です。約30年も前から、このことに確信を持って研究し、ライフワークとして終生継続され、多く問題を解決された先生の臨床医学者としての慧眼には驚かされます。

福地先生は、その後、東北大学内科学第二講座の助教授を経て、昭和50年から平成7年3月までの20年間にわたり福島県立医科大学内科学第三講座教授を務められました。先生は、内科、腎臓、内分泌、高血圧、循環器、糖尿病などの幅広い学会を舞台に研究活動を展開されました。日本腎臓学会では、監事などの要職を務められ、昭和60年の第15回日本腎臓学会東部部会を会長、平成2年の第11回国際腎臓病学会での発表や座長などの活発な学界活動をなされました。先生は福島県立医科大学でもご自身のアルドステロン研究は終生継続されましたが、医局員には、レニン・アンジオテンシン・アルドステロン系ならびに交感神経系ホルモンの高血圧の成因としての意義、ならびに腎障害・血管障害の成因などについて数々の先見性のある研究テーマを与え、それを実現するために多大な努力を払って研究費を獲得し、熱意を持って研究指導され、福島県立医科大学第三内科だけでも55人の学位研究を成就されました。診療に支障のないように、早朝から教授室で熱心に研究指導されたことは学内では夙に有名だったようです。しかし、厳しいばかりではなく、臨床においても患者中心の医療と科学的考察の両立を実践し、また常に自分の肉親を診る如く、患者さんに接するように医師を教育されるなどの人間性も示されました。

先生は、福島県立医科大学を退官後も、臨床家として実際の診療に携わり続け、産業医として、あるいは地域医療の担い手の一人として医療に貢献されました。その一方で、実際の地域医療活動のなかから訪問看護実践マニュアルなどの著書も著しておられます。

平成21年春、これまでの先生の科学的・臨床的業績が認められ、瑞宝中綬章叙勲の榮に浴されたことは、われわれ教室関係者が誇りに思うところです。

昨年、福島は大震災・津波・原発事故と未曾有の大災害に見舞われました。先生のご容態はこの頃から思わしくない経過を辿り始めました。福島県立医大病院、東北大学病院での闘病生活も甲斐なく、いまだ暑さの厳しい8月、帰らぬ人となりました。眠るような静かなご最後だったと聞いております。

昨年の大災害、特に原発事故は、戦後日本の文化・思想・価値観における一時代の終焉を意味し、日本社会のパラダイムシフトが求められているといわれます。同様に、著しい発展を遂げた戦後日本の医学・医療界も曲がり角を迎え、根本的な変革が求められるこの時期に、日本の隆盛期を支えた臨床医学者である福地先生のご逝去は、戦後の医学・医療界の一時代の終焉の象徴と実感しています。残されたわれわれの課題は、日本の医学・医療界を再生するための新たなパラダイムを構築することだと思います。われわれは、今こそ先生が示された先見性、信念、熱意、楽観性などの姿勢をお手本に、この使命を果たしていきたいと思っております。ご安堵して、ご永眠いただければと思います。

今ここに日本腎臓学会会員とともに、先生のご業績を振り返り、そのご遺徳をお忍び申し上げ、お別れの言葉としたいと思います。合掌。